

明治村 だより

2000 Autumn



秋号
Vol.21



目次

馬車盛衰記	齊藤 俊彦… 2
愛すべき馬たち	遠藤 照子… 8
移築建物の故郷	渡邊 聡… 10
蔵書紹介 4	
雲のゆくえは	11
明治村花図鑑 2 ムクゲ	12
ミュージアムショップから	13
写真コンテスト入賞作品発表	14
秋の明治村	15

表紙写真 開化文様絵紺

『明治村だより』
第二十二号発行のお知らせ
発行時期 平成十二年十二月(予定)
申込方法 「明治村だより」第二十二号ご希望の旨
及びご住所・お名前を明記の上、送料
一四〇円の切手とともに封書にてお
申し込み下さい。

平成十二年九月十五日発行
「明治村だより」第二十一号(平成十二年秋)
発行 博物館明治村
愛知県犬山市内山一丁目
電話(0566)670334 4484-0000
ホームページ <http://www.meiatsu.co.jp/meiji-vil/>
製作 大日本印刷株式会社

愛すべき馬たち

遠藤照子(当館学芸員)

明治以降、政府の欧化政策により競馬や乗馬が奨励されて外国産の馬が輸入され、在来種の馬とはまた異なった展開をみるようになった。馬は躍動的な動きからその元気にあやかろうと子供の成長や健康を象徴する動物として信仰の対象ともなった。(図1)は馬を象つた郷土玩具で、日本各地に分布する。動物をモチーフにした郷土玩具では馬が最も多いという。このことから馬は古くから人間の生活に深くかかわってきたとみることができよう。

(図2)は男の子の晴れ着で九頭の跳ね回る馬が墨描きされている。馬を題材にした童謡もあり、子供と馬とは相性がいいのかもしれない。馬に乗る遊びというのは万国共通で、古くはギリシア時代にも溯る。遊園地のメリ

ーゴーアラウンド(回転木馬)はよく知られているものだが、日本では素朴な竹馬が今でも人気である。昔は笹付きの竹を馬に見立て

たり、馬の頭部を象つた玩具を棹につけてまたがり手綱をつけて走り回るというスタイルであった。(図3)



図1

絵馬も馬にちなんだ独特な民俗資料である。社寺に馬や木馬を奉納する代わりに馬の絵を描いた木の板を奉納する習わしが昔から行われている。最近では本来の意味は忘れ去られ、願い事を書くのみで馬を描くことは少なくなりつつあるようだ。

また描かれた馬としておもちゃ絵がある。おもちゃ絵は、子供の手遊び用に描かれた版画で芸術的価値は高くないものの、写実的な描写に優れておりその種類は実に多い。遊戯・武者絵・雛飾り・台所道具・動物絵などさまざまである。この動物絵の中に比較的馬が多い。こうした版画は、子供にとって単なる遊びというより、絵によって諸物の知識を教えるカラー図鑑のような教育的役割をも担



図3

っていた。(図4)は明治二十年出版、幾英が描いた「志ん版馬徒久し」である。幾英は、芳幾の門人で明治二十年代に東京風景を多く描いている。おもちゃ絵の作者は歌川国芳の門下が主流で、芳藤・芳幾・芳員・国利などが代表的な画家である。この絵は画面を上下に分けた上の部分に、明治十七年にはじまつた上野不忍池の競馬風景が描かれている。競馬は幕末の頃居留地の外国人によって横浜根岸で始まり、明治になると各地で開催されて盛んになった。下の部分は用途によって飾りをつけたいろいろな馬が描かれているが、軍馬に鎧兜を纏った武士が乗っているのがご愛敬である。

(図5)は明治二十四年出版、同じく幾英に



図4

よる「新彫馬徒久し」である。これも上に明治十五年に開業された鉄道馬車が描かれて、下に各種の馬図が描かれている。鉄道馬車は、市街地に軌道を敷設し車両を馬二頭が曳くもので、乗務員は馭者と車掌との二名であった。これは路面電車の先駆けをなすもので、人々にとって便利な交通手段として重宝がられた。

明治から大正にかけての時代、馬のモチーフはこの他にも立版古やブリキ細工・鉛細工などの玩具に取り入れられている。現代は馬の玩具といえば競馬や乗馬グッズか干支の置物ぐらいいしか出回っていないが、かつて馬と人間とが親密な関係を築いていた時代をふりかえってみると、まさにその世相を反映したものだといえるであろう。



図5

移築建物の故郷

渡邊 聡(当館 誘致担当主任)

明治村には、東京を始めとして日本全国から、さらにはアメリカ、ブラジルから貴重な建物が移築されています。明治村に運ばれるまで地元で長く親しまれていたものや、転々と所有者が変わり、使われることなく荒れ果てていたものなど、それぞれの建物には創建から解体されるまで、実にさまざまな歴史が秘められています。

建物がなくなった元の場所「建物の故郷」は、今どんな様子でしょうか。お客様の誘致等のため、全国各地を訪問しますと、その場所が気になります。現在、明治村で結婚式を挙げられる会場として人気のある聖ザビエル天主堂の旧所在地は、京都三條の目抜き通りで(図1)、今はホテルが建ち、その隅にモダンな教会が建てられています。同じく京都から移された聖ヨハネ教会の元の場所は五條通り、高層の集合住宅に変わり、その一角に新しいチャペルがあります。



図1 移築前の聖ザビエル天主堂

東京へ行きますと、もつと様々な変化を見ることが出来ます。東京の中心、皇居前に立つと二重橋が見えます。明治村に移されている飾り電燈とそっくり同じ二代目が輝いていて、更に手前

の正門石橋飾り電燈も明治村のものと同じ形のため、ここだけは時間が止まっているように感じられます。皇居向かいの帝国ホテルに目を移すと、そこはぐっと近代的に変わっていました。関東大震災の直前にライトが建て、付近で唯一生き残った通称ライト館と言われた旧帝国ホテルのゆつたりとしたたたずまいとはうって変わって、無機質な超高層ホテルがあります。品川燈台のあった場所、品川第二台場(図2)を訪ねてみました。東京の新名所「お台場海浜公園」の一角になっています。お台場から隅田川を七キロほどさかのぼると、日本橋浜町、新大橋のあった場所へ行けます。今も新しい「新大橋」が人々の行き来を支えています。東京山の手へ行きますと西郷従道邸のあったのは目黒区西郷山、以前は従道の住まいの存在を偲ばせる地名がありました。三十年の月日はその名前も消していました。

既に、昔とはおおよそ様子が変わってしまっていますが、旧所在の土地を誘致のため訪ねたりすると、やはり昔の建物について懐かしげに話されます。そのような時、地元の方達の希望もあって、ゆかりの建物の内部特別公開をお約束することが、ま



図2 移築前の品川燈台

なかでも静岡県清水市興津にあった西園寺公望別邸「坐漁荘」(図3)は、地元興津の人々だけではなく、静岡県の方からの要望を頂き、たびたび特別に公開しております。明治の元勳



図3 移築前の坐漁荘

半田東湯だけでなく、どの建物でもご希望に応じてご案内が出来ます。ご来村の予定が決まりましたら、是非ご一報いただきます。と思います。

西園寺公が隠棲の場所として選んだ興津の地に、大正九年に建てられた近代和風の数寄屋建築です。地元から来られた人達は、移築前の思い出にひたる人、優れた建築技術に感銘を受ける人などそれぞれですが、当時、面影を知らない方も、改めて地元にあった文化財を省みる機会となっているようです。甲府近くに伺いますと、東山梨郡役所の話があります。この建物は、那の役所として使われなくなつてからは警察の建物でした。或る初老の人は、高校生であったころ、二階のペランダで煙草を吸ったという武勇伝を語ってくれました。

明治村のある地元愛知県でも南の方、知多半島半田から移された「半田東湯」は、庶民生活の舞台であるため、受け取り方が少し違うようです。当地から遠足、社会見学で来村される小学校の先生からの要望で、子供たちは銭湯の中までお入れするのですが、先生は子供時代通つたという懐かしい思い出をお持ちの方もおられますが、子供達は、現代のスーパージョウの類しか知らない子も多く、男女の仕切板の無い湯船に驚きの目を持って飛びこんでいます。(生憎、湯は張ってありません)昔あった建物が明治村に移築されているということは、昔の街の風景が明治村へ来れば蘇るとも言

蔵書紹介

4

雲のゆくえは

遠藤 照子(当館学芸員)

秋の空といえば変わりやすいことの例えに使われる。"女心と秋の空"とはよく膾炙される言葉でもある。実際秋空は変わりやすく雲も多くなる。雲は人々にとつて昔から身近な自然現象であり、歌にも詠まれ、美術工芸的な意匠としても取り入れられている。

今回紹介するのは、「雲の見方―国際雲級図解説―」(三宅武雄訳述・大正十五年発行)という本である。数年前に「雲の名前」という写真図集が発行され隠れたベストセラーとなったが、ご記憶の方もいらっしゃると思う。大正時代にもこのような本がすでに発行されていたことは非常に興味深い。今と違い一色刷りの写真図版を入れた地味な装丁となっている。

本書は訳本で、原本は「International Cloud Atlas 1910」である。この本文に加え雲にまつる文学的要素を取り入れ一種の科学詩集とも

いふべき内容になっている。序文は、著名な氣象学者で中央気象台技師の藤原咲平氏によるものである。著者は氣象の専門家ではなく文学者で、趣味で星や雲を観測している。ゆえに雲に関する専門書ではなくごく一般向けに書かれている。

第一章の雲の分類では雲のことは、文学論から始まり先人の分類による歴史の変遷などわかりやすく解説している。文中に「雲の国語クモ」といふ言葉は、旧来の解説に、久毛は組み組むにも通ひて、物の集まり凝りて芽出る意の言なり。などあつて、要するに凝結の意味であるとしている。これは雲が水蒸気の凝結した一種の状態であるといふ現代の科学的常識に照らして、いかにも古人の直感が秀れていたことに敬服せざるを得ない。」とあるように、古人は現代よりもっと雲に親しみをもって観察していたよ

うである。

二章以下は国際基準による十種類の雲すなわち巻雲・巻層雲・巻積雲・積雲・層雲・層巻雲・層積雲・乱雲・積雲・積乱雲の形の定義と解説が述べられている。古書にも散見できるように雲の異名は実に多い。巻雲の学名は、ラテン語では巻き毛の髪を意味するが我国ではみぐし雲ともいう。巻積雲を漁師が鯛雲というのは、この雲が出ると鯛がよく獲れるからだという。積乱雲はおなじみの入道雲である。この雲を江戸では坂東太郎、大阪では丹羽太郎と呼ぶ。

今でも雲を見て天候や風向きを判断することは誰でも行っているであろう。時には時間を忘れて雲を眺めやり自然のおりなす風物にゆつくりひたる余裕を持ちたいものである。

明治村花図鑑

2

ムクゲ

今回ご紹介する花は、夏から秋にかけて咲くムクゲです。ムクゲは木樨と書き、アオイ科の落葉花木でハイビスカスの仲間です。南国に咲くハイビスカスとは大分趣が異なりますが、よく見れば花の形が似ています。原産はインド・

中国あたりで日本へは朝鮮半島を経て渡来しました。韓国では国花として愛されている花です。丈夫な花木で人家によく栽培されます。高さは大きいになると三メートルにも達し、耐寒性があり、日当たりのよい水はけの良いところを好みます。開花は朝で夕方にはしぼんでしまうところから、白居易の詩に「權花一日自為榮」と詠われたった一日の命であるので、物事がはかないことの代名詞として用いられています。咲きおわると椿のように花がそっくり落ちてしまします。松尾芭蕉が「野ざらし紀行」のなかで「道のべの木樨は馬に喰はれけり」と詠んだように、その柔らかい花弁はふつと口に入れたくなるような感触を持っています。

花は白、藤紫、赤紫、底紅と多種類あります。底紅は白い花びらで花芯の部分が鮮やかな紅色をしているものです。この花は千宗旦が好んで



茶花に用いたところから、宗旦木樨とよばれ珍重されています。一重咲きも八重咲きもあり一見華やかでいてそこはかとないはかなさを感じます。

惹きます。日差し強い建造物の傍らでは一服の清涼剤のように感じられます。ご来村の折はぜひお目を留めて下さい。



ミニチュージアムショップから 4

今秋、明治村に村内交通の便として新たに乗合馬車がお目見えしました。

現代の私達にはなじみの薄い馬車ですが、これを機会に馬と馬車に興味を持って戴くためホースグッズショップ「馬車倶楽部」をオープン致しました。場所は④第四高等学校校術道場「無声堂」前に新設しました「馬の広場」にあります。

明治時代には、馬は人間生活において重要な役割を占めていましたが、今では競馬場か郊外の牧場にでも行かないことには、実際の馬を見る機会が少なくなりました。

このショップでは、馬をモチーフとした玩具や置物、小物など約三十種類の商品が扱っています。馬の置物といえば中国の唐三彩が有名ですが、ここではもっと手軽な馬グッズを揃えています。例えば、馬のペイン立て（一四七〇円）は、高さ十センチ程の軽い小さなもので、きちんと轡をはめた馬の顔が容れ物になっています。鏡をかたどったキーホルダー（一八九〇円）はやや大きめですが、ハイセンスなデザインです。



其の外にも鞍や馬蹄形などいろいろな形があります。また少し変わったものとして馬の尻尾の毛を使った小物があります。これを織り込んだ生地で作られたハンドバックは、高級品として知られています。このショップにはこの毛を編み込んだ紐を用いた携帯ストラップを置いてあります。

（右…二三七〇円、左…一六八〇円）馬の尻尾の毛は非常に丈夫で、バイオリンの弦に使われていることはよく知られています。

この他にもテーブルウエアやアクセサリーなど楽しいグッズを揃えていますので、馬車乗り場にお立ち寄りの際は、ぜひショップも覗いて見て下さい。



秋の明治村

馬車が走る

乗合馬車が新登場！

●開村35周年記念特別展

「大馬車展～馬車のすべて～」

会場：帝国ホテル中央玄関
明治時代に登場した馬車の歴史を多角的に紹介。

●明治のものうり (土・日・祝)

●秋の伝統芸能探訪・呉服座公演
「越中八尾のおわら踊り」

11月4日(土)・5日(日) 予約制

●鉄道の日 SL機関士体験

10月14日(土) 予約制

●マドンナ写真撮影会

11月12日(日)



平成12年9月9日(土)
11月26日(日)

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。



明治村賞 夏！明治村 平野博巳



マドンナ賞 春の明治村 近藤昇



大賞 秋の夏目漱石宅 功刀賢



大賞 雪の尋常師範学校 丹羽明仁



大賞 新緑の聖ヨハネ教会堂 今泉今朝雄

明治村写真コンテスト 入賞作品発表表

平成十一年度

恒例になりました明治村写真コンテストの審査が七月十九日に行われ、応募総数は九百四十四の多数にのびりました。今回は春に募集しました明治村マドンナを撮影したものを含んでいます。マドンナの撮影会は去る四月二日に行われて大変盛況でした。

今年度入賞したのは明治村賞一点、マドンナ賞一点、大賞三点、特選五点、入選十点、佳作十五点です。

通年にわたる募集のため、四季折々の風景がみられ、プロとは一味違う感性で思いがけない構図や表現に新鮮な印象を受けます。これらの入賞作品を中心に、明治村のカレンダーも製作

しています。写真で紹介しました以外の入賞作品は次の通りです。

特選作品(敬称略)

御紋所(村上竹市)、アメ売り(長屋精二)、マドンナ(増田兼義)、雨の舗道(武市正樹)、ホテルの窓より(梨本哲郎)、

入選作品(敬称略)

明治のマドンナ(佐藤正夫)、帝国ホテル(堀照雄)、朝もやの呉服座(及川理英子)、ビルヂング(氏家匡政)、春の香(小川原耕司)、光さす礼拝堂(高井和博)、黄昏時の教会(前島鉄二)、舞妓と明治村(福田満博)、桜花映(竹本幸雄)、聖ヨハネ教会堂とモデル(渡辺学)

佳作作品(敬称略)

春の天主堂(豊谷治郎)、風薫る(鈴木宏子)、昼下がり(北里研究所(稲垣量)、花水木の咲く頃(佐藤定男)、舞妓(杉浦竹雄)、好日(大嶋武夫)、イルミネーション(森浩)、平成のマドンナ(鶴田国次)、つつじの丘(小山賢二)、秋の足音(西浦朱美)、文化の日(浅井黄)、ツツジの中を力行するSL(西尾康洋)、記念撮影(鈴木恵二)、酒蔵寸景(松田雄彦)、曇さがり(安藤雅和)

☆平成十一年度明治村写真コンテストで作品を募集しています。募集期間平成十二年七月～平成十三年六月詳しくは博物館明治村「写真コンテスト」係までお問い合わせ下さい。